



稽古場で蜷川幸雄という観客のために、今日は良い芝居をしてやろうという勝負みたいな感じです。(大竹しのぶ)

台本を1回読んで覚える集中力

蜷川(以降N) 今日のお客様、大竹しのぶさんは本当に優れた女優さんです。今、僕も教えている桐朋学園で、大竹さんは演劇を学びましたが、大竹さんの上級生で今はスポーツキャスターの長田渚さんから話を聞いたことがあります。エチュード(演技実習)で大竹さんが作品を発表する時になると、長田さんたちは自分の授業を抜け出して大竹さんの演技を見に行ったという話を聞いて、やはり若い時からすごかったのだと思いました。その天才的な女優である大竹しのぶさんをお呼びします。

大竹(以降O) こんにちは、大竹しのぶです(拍手)。

N 遠路はるばるよく来ていただきました。

O 遠路だなんて(笑い)、私はもっと遠い埼玉の入間郡毛呂山町に住んでいました。父が越生高校の教師でしたから。

N 埼玉県には縁があるんだ、僕は川口だから県人会ですね。早速ですが、大竹さんはものすごく台詞を覚えるのが早くて、1回読むと覚えるという噂があります。本当ですか？

O 我ながらすごいと思ったのは、テレビの台本を駐車場からリハーサルルームに行く間で覚えたことがあります。すごく集中して、「ここで覚えなければだめ」という時は、集中力が出て。

N それって、それまで台詞を覚えていなかったということ(笑い)。でも、集中力なんだよね。

O あと図々しさです。真面目な人は「もう1回やらずにちゃ」と思うから。性格によりますね。蜷川さんは覚えるの早いですか？

N 全然ダメ。僕は真面目で不器用、頭でっかちで。

O それは役者さんの時ですよ、演出家としては？

N 演出家としては、やっぱり集中力だね。

O 蜷川さんの稽古では、他の演出家と比べようにならないくらい全員が集中します。いい緊張感、あの稽古場のレベルはすごいですよね。しかも稽古初日から。

N 「さあ、いくぞいくぞ。さあ行こう！」って、自分にも気合いを入れてるんだ。

O 「やれー！」みたいな(笑い)。自分は演出家のプロで、あなた達は役者としてプロなんだから、稽古場に来た時はそれを100%見せる、というきちんとした約束事があります。私が思ったのは、稽古場で蜷川幸雄という観客のために今日は良い芝居をしてやろうという勝負みたいな感じです。

N 大竹さんみたいにうまい俳優さんとやる時は楽しい。『王女メディア』の稽古では、登場の時の演技が普通の大竹さんだったので、「そんなのは普通、できるでしょ、もっとすごい大竹さん見せてよ」と言ったら、次の瞬間、全然違う大竹さんが見られた。

(スクリーンに『王女メディア』の映像が映される。客席に背を向け



て舞台に座り込んでスクリーンに見入る2人)

O 自分のお芝居を映像で見るのは恥ずかしいですね。でもいい舞台でしたね。

N メディアはずっと水の中にいて、男たちは権力の代表のようで、水の中にほとんど入らない。そういう構造で、「これを外国に持っていったら衝撃を与えるだろうな」と思いながら、行く機会を狙っています。ジャパネスクの要素を使わないでも成立することを赤裸々に世界に示せるのだろうなあと、この作品だけは自信があります。

演じることは人の心を治せる仕事

O 『王女メディア』は、毎日演じていて幸せでした。子どもを殺す役なのに幸せで幸せで、これは一体何なんだろうと思いました。ギリシャで2500年前に書かれた戯曲ですけど、その前に一緒にいた同じギリシャ悲劇の『エレクトラ』をやる時に「ギリシャぐらい行って来いよ！」と蜷川さんに言われ、初めて役作りのために1人でギリシャに行きました。ギリシャで気づいたのは、隠れるところが何もないこと。普通なら疲れたら木陰で休めるのですが、ギリシャは大地と太陽があるだけで何もない。「嘘がつけないんだ」と思いました。古



代ギリシャ時代に建てられた劇場に行ったら、「ここは病院だったんです」と言われ、「なんで病院に劇場があるんですか?」と聞いたら、患者さんに「あなたは悲劇を観なさい」、「あなたは音楽を聴きなさい」と、メスを使わないでお芝居などを観せたそうです。私は人の心を治せる仕事をしているのだな、私の仕事はそれなんだと思いました。殺してやるとか、憎いということが、現代とは違ってギリシャ悲劇には開放される感じがして。だから『王女メディア』の時もすごく辛い役なのに、いつもカーテンコールが終わって楽屋に帰ると「もう1回やりたい」と言っていました。

N そうそう、大竹さんだけが「もう1回やりたい」と言って、まわりの俳優たちからは非難ごうごうだった(笑い)。

O 今でもありそうな話で、今も昔もずっと変わらないのですね。

N そういう物語を演じる時の大竹さんって何てすごいんだろうと思ったし、男性や大勢いるコロシアムを相手にがんがん言って声一つ枯れない。なおかつ、もう1回やりたいと言う。

O “化けもの”とよく言われますね(笑い)。芝居をすると全然疲れないんです。蜷川さんも元気ですね。毎日楽しそうですね、生きていることも。

N 作っているって、面白いからね。演じるのはどうなの?

O 舞台に向かっていて生きているというか、自由に息が出来る感じがですね。

共感できるから嘆きあい励ましあえる

N 僕以外の演出家ともたくさん仕事をしていて、時々悩んでいるメールをくれるね。

O 蜷川さんの舞台の時は緊張感があり、一つのものに向かっていくのですが、いつもうまくいくことばかりではなくて。いい戯曲なのになんでうまくできないんだろうという自分の中のいら立ちがあって、ちょうどその時蜷川さんと電話でお話できて、「何で、そんなところで止まっているの? 世界を目指そうよ。僕たちはもっと上を目指そうよ」と言ってくれて、すごく救われました。時々内緒のメールをしています。

N きっとごまかせないだね。『マクベス』の海外公演の時、舞台は評判が良くて、客席の反応も良くて終わった夜、「蜷川さん、今日の芝居満足している?」と電話が掛かってきた。実は僕は満足してなくて、完ぺきに出来ていないなあと不愉快さが残っていて、案の定、大竹さんにも同じように不満があった。同じ感性をもってお互いに嗅覚が働いて共有するものがあるから、一緒に仕事が出来たり嘆きあえる。「わかった、本当のことを言うよ。うまくいってないよな」という電話を交わしたこともありました。1人でやれない仕事って辛い時があるよね。

O 戦いですね、でも自分の与えられたところは一生懸命やらなければいけないし。日本人だから日本語で日本人に見せればいいのに、なぜ外国に行くことに意味があるのか、よくわからなかったんですね。でもニューヨークの劇場に入った瞬間に、細胞が喜んでしまって、劇場を「わー」って走り回っていたのです。「なんで走っているんだよ、おばさん」って蜷川さんに言われましたけど(笑い)。その時お客さんは70%ぐらいアメリカの人で、そこで演技することが自由で本当に楽しくてという話をしたら、「そうでしょ、自分を客観的に見られるということが大事。世界の中の1人であると自分を冷たく突き放す場所って必要なだよ」と教えてくれて。

実は、来年3月にここでシェイクスピアの長いヘンリーもの(『ヘンリー六世』)で2つの役、ジャンヌ・ダルクとマーガレットを演じていただきます。(蜷川幸雄)

N あれは古いオペラハウスのデコラティブな劇場で、しのぶちゃんが客席の中をぎゅぎゅっと言いながら子どものよう無邪気に走っていたので結構かわいいところがあるなと思いました。そんな2人の共通の歴史があり、時には嘆きあい、愚痴をこぼしあい、励まし合っている仲です。

歌、歌う?

O えっ、いきなり? 聞いてませんよ(客席から拍手)。

N 歌も結構うまいんですよ。コンサートもやっているんですよ。

O 時々。今年も7月ごろにやります。じゃあ、『ヨイトマケの唄』を。

N 美輪明宏さんだ。

(立ち上がり、大きく一呼吸して、アカペラで『ヨイトマケの唄』を歌い始める大竹さん。照明がスポットライトに変わり、途中で感極まって涙する場面もあって、客席もし〜んと静まりかえって聴き入る。フルコーラスで5分以上、歌い終わって、ちょっと間をおいて盛大な拍手、鳴りやまない)

N 歌もうまいけれど、集中力もすごいね。感動的だ(またも拍手)。

O いきなり芝居の空間になっちゃったみたいで、すごくうれしかったです。

N 集中力があるんだね。

O お客さんがちゃんと集中してくれていたからです。一緒の世界で、一緒に作れるというのがテレビや映画とは違う。すごく世界が共有出来る。

N 歌い始めて2秒ぐらいで役に入っちゃうんだね。一挙にフォーカスに入るの?

O そうですね、音楽は一小節バイオリンが鳴ったらメロディーにのせてもらえる。芝居もそう。

N やっぱりすごいや、アカペラだし、すごい。人生でそう何回もこういうことって出会わないですよ。今日のお客さんは最高にいい曲を聴くことができた。僕も厳肅な気持ちになった、いいねえ。大竹さんとは息が合って同じ呼吸をしながら仕事をしていける、実に稀な女優さんです。その大竹さんに、来年3月ここでシェイクスピアの長いヘンリーもの(『ヘンリー六世』)で2つの役、ジャンヌ・ダルクとマーガレットを演じていただきます(拍手)。

才能を見せられると早く仕事をしたくなります。大竹さんは、こう動こうとかは稽古場で全部考えるの?

O 考えていないです。自然に動いてみる。ここでこう動くというのは、相手がいないとわからないから、全然考えないです。声もあまり出さないから稽古場で自分の声に「えっ、私こんな声出すんだ」と思う時があります。台本にも何も書いていません。

N 書き込みもないんだ。映画の場合、ワンシーンを全部通す監督もいれば、ワンカットずつの監督もいますよね。そういう場合もぜ

んぜん困ることはないんだ。

O ぜんぜん何も考えないで、「はい」みたいな感じで。

何度も演じたいのはランチとメディア

N 年齢を重ねてくると、出来ない役って出てくる場合があるじゃない。例えば「私、ジュリエット出来なくなったわ」と断念する場合って、ある?

O あえて、この役をやりたいというのがないんです。『欲望という名の電車』のランチも、メディア、レディ・マクベスも演じたから、すごく幸せですね。

N 『肝っ玉おっ母とその子供たち』という芝居もやりましたね。おっ母さんが戦場を駆けめぐって商売をしている女の話なのですが、あれは自分よりも上の年齢だったけど、実年齢より上の役を演じるのは単に芝居が面白いから? 老け役を演じるのも挑戦なの?

O 挑戦とか思わないで、面白い役だけ演じますね。やはり何度も演じたいのはランチとメディアです。

N ラunchは『欲望という名の電車』の主人公で僕が演出して、とても良くて再演しろと周りから言われているんだけど、もうちょっと経って大竹さんが熟してからと、わざと僕が引き延ばしています。今後のスケジュールは何ですか?

O 6月に串田和美さん演出の『桜姫——現代劇』をやり、8月には去年ロンドンバージョンで野田秀樹さんが作・演出した『The Diver (ザ・ダイバー)』を日本バージョンでやります、嫉妬に狂う女の役で。その間、7月に東京を始め全国でコンサートをやり、秋にミュージカル『グレイ・ガーデンズ』に挑戦します。

N やはり、歌うことが好きなんだね。

O 演劇は2時間とか、長い時間を共有して拍手をもらえるけれど、歌って歳をとった人でも手拍子できる心がすぐに沸いてくるので、ストレートで楽しいです。

N 本当に早く一緒に稽古したいなあ。今日はありがとう。



大竹しのぶ おおたけ しのぶ
東京都出身。1975年に映画『青春の門〜筑豊篇』でデビュー。同年、朝の連続テレビ小説『水色の時』に出演し、国民的ヒロインとなる。以後、その抜きん出た演技力と圧倒的な存在感から世代を超えた支持を受け続けており、舞台、映画、テレビ等で幅広く活躍、主要な演劇賞を多数受賞している。蜷川演出作品では、『メディア』『マクベス』『エレクトラ』『パンドラの鐘』に出演。主な出演作は他に、映画『石内尋常高等小学校花は散れども』『鉄道員』『GO』、舞台『スウィーニー・トッド』『太鼓たたいて笛ふいて』など。待望のコンサートが7月18日、19日に恵比寿ガーデンホールで上演。最新情報は、www.shinobu-otake.com。

Photo:大原狩行 構成:中田満之